

発 達 294

被動作主をあらわす助詞の獲得

伊藤 武彦 (和光大学人文学部) 田原 俊司 (東京大学教育学研究科) 朴 媛淑 (東京大学教育学 研究科)

日本語では格関係を標示するために助詞を用いる。格関係の理解の問題に関してみると、日本語の助詞は、表層をみれば動詞と対応してその意味が一義的に解釈されうるが、個々の助詞を取り出してその深層的意味を抽出しようとする、多義的であるものが少なくない。本研究で問題にする助詞がとつても、深層格は多重であると考えられる。がは、主格助詞として動作主や経験者等をあらわすが、受動文や可能文では逆に被動作主・被経験者等という直接目的語をあらわす。つまりがには動作などの主体をあらわす用法と対象をあらわす用法があるのである。他に連体格として所有等をマークする機能もある。つは対格の助詞として直接目的語に付き、他動詞の被動作主等を表す。動作主を標示する用法はない。しかし、空間・時間の移動補語と状況補語に付くことがある。

このように文法装置とそれの表す意味とが1対1対応していない場合、標識力すなわち文法マーカーの手掛りとしての強さ cue strength (MacWhinney et al. (1984)が弱いことが予想される。たとえば、トルコ語は、SOVを基本語順とする言語であって、膠着語的性格が強い後置詞言語である点で、日本語との共通性がこれまで言語学の分野で指摘されてきた。しかし、Slobin and Bever (1982)の言語獲得研究によれば、日本語の助詞はトルコ語の接尾辞と比較して標示力が弱いことが指摘されている。しかし同じ日本語の助詞といってもその多義性はそれぞれ程度が異なり、獲得の困難さの度合も助詞の種類によって違っているであろう。がとつは、文中の動作主-被動作主を判断するために重要な役割を果たすという点では共通するが、つが被動作主のみを表すのに対し、がは動作主と被動作主のどちらをも表す用法があり、つとは異なり単独では意味的に中立的な格助詞であるといえる。

本研究の目的は、日本語において動作主-被動作主関係の理解に及ぼす助詞の標示力を調べ、助詞が・はと比較することにある。我々の仮説は、助詞の標識力は助詞がの標識力よりも強く、獲得するのはより容易であり、したがって獲得の時期は早いということである。すでに我々は、動作主性という概念を用いて、助詞がの標識力は助詞はのよりも強いことを明らかにしている (伊藤・田原1986)。従って、もしこの

仮説が支持されれば、格関係についての助詞の手掛りの強さはつ>が>はの順になると言えよう。

方法:

被験者: 東京近郊の保育園年中 (4歳), 年長 (5歳) の幼児, 小学校1年 (6歳), 3年 (8歳), 5年 (10歳) の児童, 中学校1年 (12歳), 3年 (14歳) の生徒, 大人の8群で, 各群10名, 計80名。刺激文は全体の実験計画では助詞の要因 (φφ・φつ・つφ: φは助詞無しをしめす)、動詞の位置の要因 (N NV・VNN・NVN: Nは名詞句, Vは動詞句)、名詞の意味の要因がやはり3水準で (AA・AI・IA: AはANIMATE, IはINANIMATE) であった。

実験材料: 刺激文を録音したカセットテープ, ミニチュアの動物と小物, テープレコーダー, A4の白紙, 記録用紙。各文型に対して一文ずつ, 合計27文を録音した4種類のテープを用意した。また, 4文を録音したテープを, 練習文として作成した。ミニチュアや小物は, 練習文・刺激文中の生物, 無生物名詞に対応するものである。

手続き: A4の紙の上のランダムに置かれた12個のミニチュア, 小物を命名することができるかどうか確認した後, 教示を与え, 練習文のテープを聞かせ実演することができたら課題に入る。ミニチュア・小物の位置を変えて, 4本のテープのうちの1本を実験者が無作為に選び出して, 聞かせて, 実演させる。終了後, 残った3本のテープのうちの1本を無作為に選び, 同様の手続きで実演させる。

結果

Table 1, Table 2. のφφv・φつv・つφvの3文型は, 今回の実験のデータの一部によっており, 残りのはとがについての右側の4文型は, 伊藤・田原 (1986)の結果によっている。Table 1.は各文型における第一名詞を動作主として選択した率 (%) をあらわし, Table 2.は, 助詞に基づいて動作主を選択した率 (正答率) を示している。

Table 1, 2に見られるように, 動作主-被動作主-動作 という順番に表層化されるいわゆる正語順の文型であるφつ文・がφ文・はφ文の3文型では, あまり年齢群間差が大きくなかった。しかし全体的には, φつ文>がφ文>はφ文 という順に助詞による動作

主選択率が高かった。すなわち、正語順においてヲの格標示力はガの格標示力よりも大きかったといえる。文型間差が顕著に認められるのは、第一名詞が被動作主にあたるいわゆる逆語順の3文型であって、全年齢を通して、逆語順の3文型を比較すると、ヲ ϕ 文> ϕ ガ文> ϕ ハ文という順序で正答率の差があり、ここでも格標示力はガよりもヲの方が強いことが示された。

語順と助詞が対立するヲ ϕ 文をみると4歳児群と5歳児群の正答率がそれぞれ38%と57%ということで、この2群については助詞に基づく文処理に語順が大きく関与することが示された。特に4歳児については、助詞ヲが付いているにもかかわらず、第一名詞を動作主と選択した率の方が助詞に基づく選択よりも多かった。

名詞の意味(animacy)に依存する度合は、 ϕ ϕ 文>ハ ϕ 文>ガ ϕ 文> ϕ ヲ文の順であり、この点からもヲの手掛りの強さが明らかになった。

考察

ヲの格標識力はガよりも強く、仮説は支持された。助詞の意味が多重的なガよりも、ほほいつも目的語のマーカ―として使われる形式と意味の対応が明確なヲの方が、格助詞としての機能が強く、習得しやすいといえるのではないだろうか。

意味の要因や語順に左右されること無く、助詞の機能に基づいて文処理を文法的に正しい方法で行うことができるようになるのは小学校以降である。遅い獲得

の原因として指摘されなければならないのは、子どもの言語能力の問題よりも日本語の助詞の標識力の弱さの問題であろう。日本語文法教育の重要性が示唆される。

幼児が大人の発話の構文を理解し始める時期について瓜生(1986)は、2歳以前の子どもでも生活場面では養育者のかなり複雑な言語教示に従えることが経験的に知られていることを踏まえ、使役命令文における動作主体と動作語の理解が2歳頃すでに成立することを実験で確かめた。しかし他方では、文法的な手掛りである助詞の手掛りを、意味の手掛り、例えば有生性animacyや、語順などと対立させた場面や、受動文の理解を課題としたときなどでは、文法的知識に基いて正しく文処理ができる時期は遅いことが知られている。本研究でも、このことが指摘される。

実際の言語運用では、文理解の手掛り(助詞・語順・意味等)は競合的でなく相乗的に働く場合が多く、獲得途上にあっても、現象的には獲得ずみのように観察されうる事もあろう。日本語助詞の使用・理解の開始から完成までの過程や、習得の機制を明らかにすることが今後の課題である。

【文献】

- 伊藤武彦・田原俊司 1986 ハとガの動作主性の発達。パン F. C. ・八代京子・秋山高二(編)ことばの多様性、87-106。文化評論出版。

Table 1. First noun choice as agent in each sentence type (%)

	ϕ ϕ v	ϕ ヲ v	ヲ ϕ v	ガ ϕ v	ϕ ガ v	ハ ϕ v	ϕ ハ v
4歳群	72	78	62	78	42	80	53
5歳群	80	90	43	85	35	93	45
6歳群	85	95	23	83	45	90	52
8歳群	85	97	17	83	38	83	38
10歳群	83	90	27	97	18	93	28
12歳群	87	97	8	90	18	87	23
14歳群	80	97	7	93	10	87	12
成人群	80	98	3	90	22	80	23
MEAN	81	93	24	88	29	87	34

Table 2. Correct answer according to the particle (Particle strategy use) (%)

	ϕ ϕ v	ϕ ヲ v	ヲ ϕ v	ガ ϕ v	ϕ ガ v	ハ ϕ v	ϕ ハ v
4歳群		78	38	78	58	80	47
5歳群		90	57	85	65	93	55
6歳群		95	77	83	55	90	48
8歳群		97	83	83	62	83	62
10歳群		90	73	97	82	93	72
12歳群		97	92	90	82	87	77
14歳群		97	93	93	90	87	88
成人群		98	97	90	78	80	77
MEAN		93	76	88	71	87	66